

川崎 哲也*: 菊咲きのオクチョウジザクラ

Tetsuya KAWASAKI*: A multi-petaled form of *Prunus apetalata*
var. *pilosa* (Koidz.) Wilson.

新潟県西蒲原郡弥彦村の弥彦神社宮司野上正篤氏宅にオクチョウジザクラの菊咲きのものが栽培されている。木は小さいが根元から数本にわかれていて枯れ株も切りとつたあとみられ、オクチョウジザクラとしては相当の年数がたつていると思われる。始め昨年5月に訪れた時、同神社の石塚鶴雄技師がつくられた半がわきの腊葉標本を拝見したが、その時は新潟県下にはところどころに見られるホウキザクラ系統のもののように思つた。しかしすでに色が変わつていたのではつきりしなかつた。ところが今年4月にはちようど開花期に行つてみてオクチョウジザクラの品種であることがわかつた。

オクチョウジザクラは本州中部以北に分布しているもので弥彦山でも特に山頂附近では非常に多くみられる。そして若葉の色、花の色、花の大小、花卉の形などは個体によつて相当の変異がみられる。若葉の色は帯黄緑色、帯褐緑色から濃紅紫色に至るまでのいろいろな程度のものがみられ、花の色も純白色から淡紅色に至るまであり、花卉の先端だけ淡紅色を帯びるものもある。花卉の形もほとんど完全な円形のものから、非常に細長いものまであり、千差万別である。しかし注意してみても花卉数の増加する傾向のあるものはみられなかつた。ところがこの菊咲きのものは花卉が非常に多く、花によつては200枚を越すものがあつた。少ないものでも約100枚はあり、多数の花について調査しないと変異の程度は正確にはわからないが、花卉数は非常に多いものである。しかし葉の形状や樹型などは原種のオクチョウジザクラとほとんど変りがない。

ヤマザクラを原種とするキクザクラ類の場合はやはり花卉数が非常に多く200枚以上に達するが、この場合は野生のものでも多少重弁化したものがみられ、さらに栽培されているヤマザクラには花卉の相当多いものもあり、また萼片が10枚のものも知られている。それでも単弁のヤマザクラからキクザクラまでの間を連続してうづめるようなものがそろつてはいない。しかしキクザクラのようなものが突然に出現したと考えるのはどうも無理なように思う。恐らくその間を順につなぐようなものがあるものと思われる。オクチョウジザクラの場合もよく調査すれば野生のもので重弁のものがみつかるものと思ふ。

花の構造上興味あることは、このザクラが単に花卉数が多いだけでなく、キクザクラ類やある品種のサトザクラにみられるような二段咲きの花を着けることである。ヤマザクラからキクザクラができたのに平行的に他の種のザクラからも非常に花卉数の多いものが出てくるのは面白いことである。

* Harayama Lower Secondary School, Urawa, Saitama Pref. 埼玉県浦和市立原山中学校。

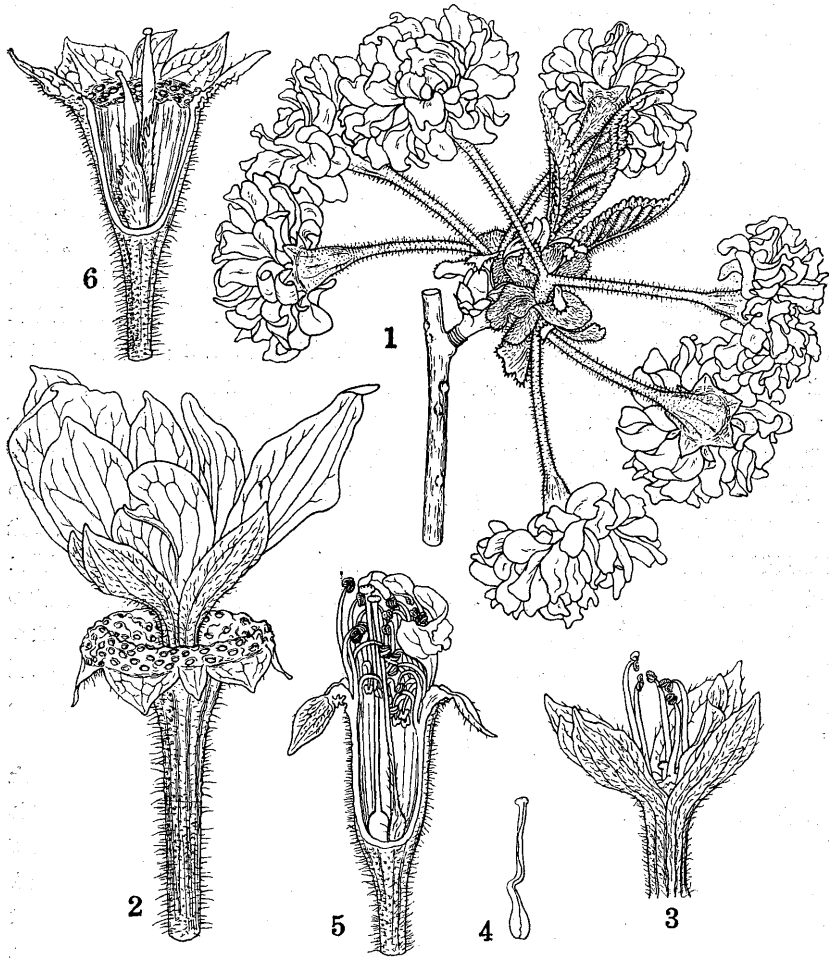


Fig. *Prunus apetala* var. *pilosa* f. *multipetala* 1. Ramulus florifer ($\times 1$). 2. Flos sine petalis exterioribus ($\times 3$). 3. Flos interior sine petalis ($\times 3$). 4. Pistillum floris interioris ($\times 3$) 5, 6 Sectio floris singularis sine petalis ($\times 3$).

***Prunus apetala* Franch. et Savat. var. *pilosa* (Koidz.) Wilson f. *multipetala* T. Kawasaki f. nov.**

Calycis tubus infundibuliformis vel campanulato-infundibuliformis vulgo 8 mm longus apice 7-7.5 mm latus. Calycis lobi 10; exteriores 5 late triangulares 2-3 mm longi 4 mm lati; interiores 5 oblongi 1.5 mm longi 1 mm lati. Petala circiter 180-

220 anguste oblonga apice truncata basi acuminata vel acuta circiter 11 mm longa 5 mm lata. Stamina pauca saepe 0. Pistilla vulgo 2 cum stylo glabro flavo-viridescente et ovario viridissimo saepe foliis parvis vel flosculo transformia.

Nom. Jap. Hinagiku-zakura nom. nov.

Hab. Yahiko, prov. Echigo cult. (T. Kawasaki, Apr. 19, 1959—typus in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo.).

若葉は帯黄褐緑色で野生のものでもよくみられる色である。萼筒は通常ロート形で日の当たらない面は淡黄緑色で、やや紅褐色を帯びる。日の当る側は帯紅紫褐色で、時に暗紅紫色または紅赤色を呈する。暗緑色の縦線を有する。萼片は通常 10 枚で正常のもの 5 枚は普通の大きさであるが、その間に 1 枚ずつ計 5 枚の小萼片を有する。これはキクザクラ類では普通にみられる形である。色は黄緑色で部分的に紅紫褐色を帯びるかまたは全体にわたって紅紫褐色を呈する。花卉は細長くほとんど白色であるが、時にわずかに先端が淡紅色を帯びる。つぼみは微淡紅色である。雄蕊は少なく、花糸は白色であるが後に淡紅色となる。花は二段咲きとなるものが多く、その場合は雌蕊が 1 個の小さい花で置き換えられた状態となる。内側の花の萼片は外側の正常のものが三角形で小さいのにくらべて楕円形でずつと大きい。その萼片は円筒形の萼筒の上端についており、内側には雄蕊を有する。中央に雌蕊 1 個がある。二段咲きにならない花では雌蕊は通常 2 本でしかも多くの場合小葉に変化している。そして原形のままの雌蕊では無毛であるが小葉化している場合は有毛である。図の 5 は最も変化の程度が低くて、花卉が多いほかは原種とほとんど変らない場合である。このように変化の程度は花によつて異なる。花卉が非常に多い場合は花が球形を帯びて来て、ダリアなどのボンボン咲きのような感じとなる。

○ナデシコ科の新外来品 (水島正美) Masami MIZUSHIMA: *Silene dichotoma*, a new alien.

ヨーロッパ東南部原産の *Silene dichotoma* Ehrhart が北海道天塩国、上川郡下川町の字ベンケのクローバー畑から見出された (1950 年 7 月 11 日、中村勇二氏採集。越後刈羽郡小国町在住の岩野俊逸氏の乾園中にある)。本種は古くから栽培又は帰化しているマンテマ (*S. gallica* L., var. *quinquevulnera* Kock を含む) によく似ているが、白花で花卉が 2 中裂するので直ちに区別出来る。2 又分岐した花序の基底に有柄の 1 花を着けることもマンテマに見られぬ所である (牧野図鑑 1763 図を参照されたい)。ヨーロッパでもクローバー畑に生えると云うが、北海道のものは多分アカツメクサか何かの種子に混入して輸入されたのであろう。北米にも広く帰化しているので、クローバー種子の輸入先を確かめれば伝播ルートを容易に掴めよう。和名をマンテマモドキと新称する。

(東京都立大学牧野標本館)